

2018 年（平成 30 年）度

ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

「自分の力や考えに自信をもち、前向きに行動する子ども」

～気づき、発見したことを伝え、教師や友達と探求していく過程を通して～



札幌市立もいわ幼稚園

目 次

1 はじめに

- (1) 今年度の園研究と「科学する心」について
- (2) 保護者とともに取り組む研究について
- (3) 「科学する心」を育むために大切にしたいこと

2 実践事例

(1)雪山大作戦 年長5歳児(平成29年12月～平成30年4月)

- ① 雪山作りをお願いしに行こう！
- ② 雪山で体を動かして思い切り遊ぼう！
- ③ 雪山でたくさん遊んだお礼に行こう！
- ④ 暖かくなってきた、雪山を崩そう！～雪解けの気付き～



(2)ムシムシ研究所 年長5歳児(平成30年6月中旬～7月中旬)

- ① ムシムシ研究所にしよう！
- ② ムシムシ図書館を作ろう！
- ③ ドクガ虫注意を知らせよう！（ムシムシ避難訓練）
- ④ 街の人にも伝えなきゃ！（ドクガ虫注意のポスター掲示）
- ⑤ ムシムシ研究を発表しよう！



3 科学する心を支える「保護者との研究の取組」

- (1) 家庭での関わりを豊かにする「宿題」の取組
- (2) 保護者と成果を共有する「笑顔のレシピ」の作成

4 おわりに



「自分の力や考えに自信をもち、前向きに行動する子ども」

～気づき、発見したことを伝え、教師や友達と探求していく過程を通して～

1 はじめに

(1)今年度の園研究と「科学する心」について

本園の幼児の実態を捉え直した時に、幼児自らが自信をもち、「やったらできる」とイメージして取り組み、間違っても失敗しても、考え直したり経験を生かして工夫したりしてほしいと願い、研究テーマを『自分の力や考えに自信をもち、前向きに行動する子ども』とし、今年度も継続して取り組むこととした。

また、自ら「目標をもち頑張ってみようとする」「考えて試す」「人に助けを求めて実現しようとする」など主体的に新たな課題に取り組むためには、豊かな体験を通して知識や技能を積み上げていくことが必要ではないかと考えた。そこで、感じる、気付く、分かる、できるようになるための豊かな体験となるよう実践を通して、豊かな体験を促す環境の構成や援助を探り、幼児が感じたり気付いたり分かたりできるようになったりする経験を重ねることで、主題に迫ろうと考えた。

これらの園の研究の推進にあたって、幼児が「自分の力や考えに自信をもち」ためには、感じていること、興味あることや気づきを丁寧につかみ、受け止め、「どうして?」「こうしたらどうだろう?」と疑問をもつ過程を教師も一緒になって考えていくことが大切である。また、その中で自分なりの答えを見い出していき、必要感をもってやってみようとする力につながっていくことが、前向きに行動しようとする力を育てていくことにつながり、まさにその過程は、「科学する心」を育てることと重なるのではないかと考えた。事例を通して研究する際に、幼児の気づきや発見したことを、教師や友達と探求していく過程を大切に考察していきたいと考えている。

(2)保護者とともに取り組む研究について

幼児が自分の考えに自信をもち、前向きに行動することができるようになることを願い、これまでは、家庭でも保護者が子どもと向き合うことができるように「宿題」を依頼して取り組んできている。今年度は、保護者が引き続き家庭での温かい関わりを大切にしていけるよう、学級だよりなどで子どもと触れ合えるような遊びを投げ掛け、協力を求めていく。さらに、保護者が保育参加や運動会・発表会などの行事に参加する機会や家庭で絵本の読み聞かせをしていただく機会として、月2回の絵本の貸し出しの時にも、子どもの面白がることや反応などを記入していただくことで、より子どもの思いに共感できるようにと願っている。



(3) 「科学する心」を育むために大切にしたいこと

昨年度のソニー幼児教育支援プログラムの取組から次のような課題が挙げられており、今年度の保育の実践にあたって、意識しながら科学する心をはぐくんでいきたい。

- ① 心を動かす事象に出会い、感じたり気付いたりしたことを様々な方法で表現できるようにする。

幼児一人一人が感じたり、気付いたりして表したことを丁寧に受け止め、共感することで『伝えたい』『知らせたい』という気持ち高め、言葉や動きで伝える、描くこと、作ることなど様々な表現を通して表す力をさらに育んでいきたい。

- ② 自ら興味・関心をもち、気付きが生まれる環境の構成を工夫する。

自然事象や自然物などに目を向けられるような動きかけや意図的な環境構成を工夫し、幼児自らの気付きが生まれ、友達と考えることができるような状況作りを実践していきたい。

- ③ 教師自身が面白がり、科学的な思考が深まっていくように援助する。

教師自身も幼児と同じように疑問に思ったり、推測したり、試行錯誤したりする楽しさを感じ、幼児と共にその発見を面白がり、興味関心が高まったり、物事を深く追求したりする姿勢を育てていきたい。その中で、感じる心を育てるとともに科学的な思考が深まっていくようにしたい。



- ④ 幼児たちに任せるポイントを押さえた援助をする。

環境の構成によって幼児たちが「何を感じ、何に気付き、何が分かり、何ができるようになったか」を捉えて考察するとともに、教師自身も試行錯誤しながら、幼児たち一人一人の育ちに合わせて、見守る、手を貸す、一緒に考えるなど、援助を工夫していきたい。



「捕まえたよ！」

2 実践事例

(1) 雪山大作戦 年長5歳児(平成29年12月～平成30年4月)

① 雪山作りをお願いしに行こう!

数年前から、地域の建設会社の方が地域貢献の一環として、本園の園庭に雪山を作成してくれている。例年は、冬休み中に雪山を作ってもらい、3学期開けに坂滑りなどに活用している。昨年12月は降雪が少なく、自分たちで作った雪山でのそり滑りも物足りなさを感じ始めていた。それをきっかけに雪山作りに関心をもってもらい、地域の方と関わることや雪山に対する思いをもってほしいと願い、雪山を作ってくれる会社をお願いしに行くことになった。

■平成29年12月21日 「大きな雪山を作ってほしい!」

「**年中の時に雪山を作ってくれたのは誰か?**」を園長先生に聞きに行き、会社の地図を書いてもらう。手紙を持って行ったらいいとの考えで、「ゆきやまをつくってください」と書いて、数名の男児が出かけることになった。担任と共に会社に行き、担当の方に「**大きな雪山を作ってください。かえで木の半分の高さにつくってください**」などと頼み、「いいですよ」と笑顔で引き受けてもらった。



「雪山を作ってください!」

■平成30年1月18日 「雪山を作りに来てくれた!」

朝から重機とダンプカーが来て、「**わあ～、本当に来てくれた!**」と預かり保育で来ていた幼児3人が雪山作りの様子を終始見ていた。

①「ダンプカーで29回も運んだよ」 ②「雪を集めて固めたよ。」

③「平らにして滑るところを作ったよ。」

④雪山が完成!「作ってくれてありがとう」と熱い握手を交わす。

⑤「ぼくたち滑ってみるかい?」と声を掛けられてそりで頂上から滑ってみると、勢いよく滑り降りて、大喜びであった。



ヘルメットをかぶって作業を見守り中

その際に「大きくなったら一緒に働かないかい?」と誘われて、「やる!」と目を輝かせ、将来の夢を建設会社に変えた子もいる。そこで担任は、雪山を作成する様子を他の友達にも伝えたい思いを受け止め、写真を用いて3人と共に大きな紙に書き出した。

■1月20日 始業式にて 「雪山作りの様子を友達に伝えたい!」

3学期の始業式の中で、雪山作りを見ていた3人の幼児に、作業の様子の紙を見て説明をしてもらった。「滑ってみたら、ジェットコースターみたいだったよ!」式の後で、いつになく素早くつなぎ(シャンパー)を来て、用意を整え、**戸外に飛び出していく様子**が見られた。ソリを持って雪山に上り、一人一人が滑って確かめてみる。「**本当だ、よく滑る!**」と実感。一人で黙々と、友達と一緒に、繰り返し何度も滑ることを楽しんでた。



「雪山は、すごく滑ったよ!」

■1月22日 「雪山が滑らない!」～次頁の「雪山除雪」を参照

翌々日、20cm程の降雪がある。そり滑りをしようと思った幼児も、滑らないので「**雪山が滑らない!**」と声を上げる。それを聞いた年長男児ら数人が、ミニダンプを持ってきて除雪を始める。(詳細は次頁事例参照)

新雪が降るたびに、建設会社の人ようになって、ミニダンプをもってきて除雪が始まる。斜面の除雪が終わると、他学級の友達が歩きやすいようにと考えて雪山の周りも真剣に除雪をしている。こうして、降雪の度に、「道興建設ごっこ」が続く。



建設会社の人になって除雪中!

以下は、ここまでの事例を一旦のところ、本園の昨年度の研究の視点「ものとの関わり」「自分のとの関わり」「人との関わり」で幼児の姿をまとめて考察してみました。

きりん組 「雪山除雪」

昨年12月末に「大きな雪山を作ってほしい。」と、地域の道興建設さんをお願いに行ってきた年長組の男児数名。冬休み中に、お願いした通りの雪山ができ、預かり保育で休み中に滑った子から「ジェットコースターみたいによく滑る。」と始業式で報告を聞いて、子どもたちは全員大急ぎで戸外に飛び出して、ソリ滑りを始めました。大きな雪山は、よく滑って楽しく、雪山作りを頼みに行った子どもたちは、少し誇らしげな表情でした。翌日は、積雪がありました。朝一番で戸外に出た子どもたち。女兒が山の上から滑ろうとすると、全く滑りません。その様子を見ていた男児が「ちょっと、待ってて！」と言わんばかりに、黙々と雪山の除雪を始めました。

<ものとの関わり>

「こんなに雪がいっぱいあったら滑らない。」と気付いた幼児がママさんダンブを取りに行きました。

下から雪を集めて山の上に登り、後ろの崖に捨てます。一人が始めると、みんな大急ぎでダンブやシャベルなど自分の使いやすい道具を持ってきて、黙々と除雪を始めます。途中で「一回、滑ってみて！」と滑り確かめ、曲がったところに雪を足したり、できるだけ平らにしたりして斜面をまっすぐ滑るまで試しながら除雪を繰り返しました。

思考力

自立心

自然・生命



曲がっちゃう〜!



<自分のとの関わり>

始業式の日、園の多くの子どもたちがソリ滑りを楽しんでいます。雪山作りを頼みに行った子どもたちは「道興建設さんに、頼みに行って良かった〜!」誇らしげな気持ちで見えています。

翌日、積雪が積もって全く滑らない山。「俺たちの山、今日は滑らない。」「大変だ〜。どうにかなくっちゃ。」「よし、昨日みたいに滑るようにするぞ。」「山の下も歩けなくなってる。」「今度は、道を作ろう!」と言って、道作りが始まりました。

感性・表現

協同性

自立心

思考力

自然・生命

<人との関わり>

「うさぎ組の時、雪山は誰が作ってくれたんだろう?」「道興建設さんだよ。」と言うと「園長先生に、どこにあるか聞いてみよう!」と言って園長先生に地図を書いてもらい、数名の男児で道興建設へ行きました。「モミジの木の半分の高さに作ってください。」とどんな山にしてほしいのか、自分たちの言葉でお願いしました。「はい、分かりました!」と、優しい笑顔で答えてもらい安心した子どもたちです。

何もなかった園庭にお願いした通りの雪山を作る“道興建設さん”に憧れの気持ちをもった子どもたち。積雪のあった日、滑らず困っている友達の様子を知り、「どうにかしてあげたい。」と思う優しさ。除雪を始めた仲間の様子を見て、すぐに参加する仲間意識の強さ。「道興建設さんみたいに、綺麗に除雪しよう!」など、年長児らしい人への思いが見られました。

社会生活

言葉

協同性

思考力

道徳性

<養護(安心・安定・アタッチメント)>

積雪20cmもある中の道路作りは、幼児にとっては、なかなか根気のいる作業でした。教師の「子ども道興建設さん、ご苦労様です。」の一言で、一気にやる気が増します。雪山除雪の後、雪山でソリ滑りをした仲間に「滑るようになったよ!」と言われたり、年中さんに「ありがとう。」と言われたりして、満面の笑みがこぼれます。“ちゃんと見てたんだ”“役に立ってるんだ”という思いが自信になり、また何か人のためになることをやってみようという意欲に繋がります。

道徳性

社会生活

自立心

協同性

思考力

感性・表現

② 雪山で体を動かして思い切り遊ぼう！

■1月～2月 心も身体も思い切り動かして雪で遊ぼう！

雪山の裏斜面は急な絶壁の面となっている。斜面を滑るために、雪山の横面には階段を作っているが、裏斜面はあえて足を掛ける場所は作らず、教師が登って見せることで、幼児たちからも登りたい一心で雪山に登ることに挑戦し始める。最初は、手足の置く位置が分からず、手で支えられない、踏ん張りがきかないことなどから、何度もずり落ちていた。そのうちに、登ることができる幼児がいて、その幼児の登る様子を見て足や手の位置を真似て、挑戦が始まった。**何度も、粘り強く挑戦する姿が見られた。**なかなか登ることができない幼児には、山の上から手を差し伸べて引っ張り上げる友達や下から押し上げる友達の様子も見られ、友達の力を借りながら成功する幼児もでてきた。でも、自分で登りたいという気持ちが強く、その後も挑戦し、できるようになっていた。



冬期間の雪山は、毎日雪面の状況が変わるが、新雪のあった日は、登りやすく、冷え込んでツルツル雪面では、氷の斜面となりなかなか登れないことを経験している。

また、斜面では、米袋で作った手作りそりやプラスチックのそり、数人が乗れるひも付きの特製「まほうのじゅうたん」、チューブなど様々な遊具で試して滑る。始めは、先生と一緒に滑り、慣れてくると一人で滑り、友達とくっついたり、数人が乗れる「まほうのじゅうたん」を友達に引っ張ってもらったりして、何度も繰り返し滑って楽しんだ。**毎日、気温や気象の状況、雪面の状況によって滑り具合が違うことにも次第に気付き、友達にも知らせて、遊ぶことを楽しんだ。**

■2月上旬 オリンピック選手のようにになりたい！ ～スノーボード～

そり滑りも次第に大胆になり、ある幼児がプラスチックのソリに立ち乗り滑りを始めた。斜面の状況で危険が伴う場合は、高さの低く傾斜が緩やかなところから滑るように促すなどして、安全に滑ることができるように約束をして取り組んでいる。

ちょうど、この時期はピョンチャンにて冬季オリンピックが行われていた。カーリング、スキージャンプ、スピードスケート、スノーボード等の日本の選手が大活躍する度に、幼児たちもあこがれをもって真似をして遊びに必要な物を作り、遊びが繰り広げられた。



雪山の周りを走って回る「スピードスケート」、プラスチックソリに立ち乗りをして、斜面を滑り降りる「スノーボード」が出てきた。腰やひざを曲げてバランスを取り、少しずつ滑る距離を伸ばしていく。繰り返し挑戦するうちに、坂の中腹から滑ることができるようになり、競って滑っていた数人がいた。ちょうどオリンピックのスノーボードの競技が行われており、この日3人がエントリーをしてオリンピックが行われた。年長児が金銀銅のメダルを用意して、友達が応援する中滑っていた。皆がバランスをとって真剣である。協議後、表彰式も行われた。

幼児の遊びは、社会ともつながっているので、オリンピックなどは、真似ごっことして子どもの興味関心から生まれてくる遊びを自分事として取り組めるようにしていくことで、一人一人の自信につながり、前向きに行動するきっかけとなった幼児も見られた。

③ 雪山でたくさん遊んだお礼に行こう！

■3月7日 「雪山を作ってくれてありがとう！」



修了間近の年長児は、これまで雪山で体をうんと動かし、何度も繰り返して、楽しく遊ぶことができたことを振り返る機会をつくる。すると、幼児たちから、お礼に行きたいと声が上がった。そこに PTA 会長も加わり、お礼に行くことになった。

建設会社の方がかぶっていたヘルメット（ボールに綿ゴムをつけたもの）をかぶって行く。修了の記念にと作った紙版画の自画像を貼ったカレンダーをプレゼント。園とPTAからは、感謝状などを持っていき、手渡ししました。「**雪山つくってくれてどうもありがとう。たくさん、楽しく遊びました。**」とお礼を伝えると、会社の方も喜んでくださり、皆が嬉しそうでした。



④ 暖かくなってきた、雪山を崩そう！～雪解けの気付き～

■4月9日 新年度が始まって…

始業式の後、例年より雪解けが早く、園庭の雪山以外は、全て解けてしまった。しかし、幼児たちは、早速、ソリを持って滑りにいく。「**でこぼこで、滑らないね**」と以前とは違うことに気が付いていた。「明日（入園式）から、ぼくの妹（小さい子）も園に来るから、雪山があったら転んで怪我をするかもしれない。雪山をなくしたい。」と、年下の子のことを考えて伝える姿があり、友達とは、「雪山を崩すといいね」という話になる。

早速、幼児用のプラスチックシャベルで掘り始めるが、硬くて全く歯が立たない。そこで、「**大人の力も借りなきゃ**」と、用務員さんと呼ばびに行く。園長もかり出された。大人が剣先スコップで掘っても、かなりの力がある。表面が真っ黒の雪山の中は、氷の塊で相当硬いと掘っていて分かった。

「**雪を溶かすには、水をかけるといいんだ！**」と雪解けの泥水をバケツに集めて、自分たちの掘った穴に入れてみて、「ほうらね」と少し解ける様子を確認している。ただ、水を集めて入れる子もいれば、本当に解けるかをじっと見ている子もいた。過去の経験から知っていることを試して確認することは、探究する心につながると感じた。

穴を掘りながら、「この穴チョウチョみたい。」と見立てを楽しんだり、「温泉にしよう」など、遊びが進む中で、気付いたことを友達との伝え合い、遊びの方向性をさぐったりする様子も見られた。

これまで、一つ上のお兄さん、お姉さんが、雪が降ったら除雪をして、その都度楽しく遊べるようにかかわってくれた山、大切に遊んできた山だからこそ、思い入れをもって、雪山と関わる姿が見られた。



■4月中旬 雪山に穴を掘って、トンネルができたよ！

雪山のあちらこちらに穴がたくさんできた。隣の穴とつなげようと、大人の手も借りながら掘り進むと、向こう側に光が見えてきて、つながるかもしれない見通しをもって遊ぶ姿につながっていた。つながった瞬間を見ることができた子は、「穴がつながった。トンネルできた！」と歓声をあげて、喜びを友達とも分かち合っていた。

トンネル掘りも、どちらの方向に掘ると、穴がつながるのかを考えて掘り始めるなど、遊びの中で何度も繰り返すことで、こうつながるかなという見通しも鋭くなっていくことを感じた。そして、トンネルをくぐるには、体をいろいろ動かしながら試すなど、体の感覚や動きなども自然と感じながら遊んでいた。また、その様子を他の学級の幼児もみて、同じようにくぐるなど、かわりが広がる姿も見られた。



「ほうら、通れたよ」



もうすぐつながるよ！

■雪解け水は、冷たい！「かき氷ごっこ」が楽しい！

雪山を掘り進むと、中は天然の氷が出てきて、「宝石がたくさんだ」と喜ぶ子もいる。輝きも美しく、宝石に見立ててバケツに集めたり、ままごとをしていた子は、お玉などで氷を崩していくことで少しずつ溶けていく様子を見たりと変化を楽しむ姿が見られた。

進級、入園したばかりの4歳児は、砂や土に雪解け水や雪水を混ぜて、ごちそう作りや、かき氷作りになり、先生に食べてもらうなどのやり取りを喜び、安心して遊ぶ様子につながっていた。氷を触ってみると冷たいことを感じたり、日差しが強いところは、雪解け水も温かくなっている様子に気付いたりする子も見られていた。

■4月19日 雪解け水が池になった。船を作って浮かべよう！

雪解け水が、園庭に川のように流れ出し、水たまりになった。年中の男児が、水の上に遊具の船を浮かべて遊んでいた、そこからの発想か、「年長男児が「船を造らない？」と言い出した。以前に作ったことがある？作っていた。R男は「雪がなくなったね。今度は、僕たちが頼みに行くんだね！」とつぶやいていた。



自分たちの船、浮かんだね！

《考 察》 雪山での遊びは、様々な力を引き出してくれた。

- ・建設会社の方とかかわるきっかけを作ったことで、自分たちで雪山を大切に使おうとする思いが強くなり、主体的に自信をもって行動するようになってきた。そのことが、「自分たちの雪山」として、園全体でも感じるようになり、雪山で遊ぶ時にもいつも以上に思い切り遊ぶ、雪遊びを満喫する様子が見られたことは大きかった。また、地域の方への感謝の気持ちも忘れないようにもたせることで、いろいろな人の力を借りながらも、自分たちでその環境を生かして、主体的に遊ぶことが実現できたものと思う。
- ・季節の移り変わりを感じ、雪解けの変化や水に変わる様子、冷たさ、温かさなど様々な心地よい感覚、楽しい遊びとして子どもたちには残ったのだろう。冬から春の季節の移り変わり、様々な変化を感じながら遊び切ることができた経験は、次の雪遊びにつながっていくことだろう。
- ・雪山は、挑戦意欲や全身の筋肉を使うこと、力加減やバランス、手や足の踏ん張り、登ったり、滑ったり、転がったりと雪の状況にもより違いはあるが、様々な全身運動を、自発的な活動としての遊びの中で自然に体験することができる。体作りや体力をつけるには最適である。

(2)ムシムシ研究所 5歳年長児（6月中旬～7月中旬）

① ムシムシ研究所にしよう！

園庭には、ピオトープ（池）があり、これまでもアメンボウやボウフラ、おたまじゃくしなどを見付けては捕まえ、飼育ケースに入れて飼っている。

■6月15日頃～ 土の中にいるムシを探そう！

男児たち数名が、畑の土を掘り起こしていると、カブトムシよりは小さいが似た形の幼虫を発見。飼育ケースに入れて、保育室で飼うことになった。「他の場所も探してみよう！」と仲間と畑や池の周りなどを連日探し回る。教師は、虫を探したいという幼児の思いや意欲を認め、気付いたことや発見したことも認めていった。

■6月18日 「なぜムシ」を発見、何のムシだろう？

園庭の他の場所を探しているうちに、初めて見る虫を発見した。「何だろう？」「大発見じゃない！？」と新しい虫を発見したことがうれしく、みんなで調べることになった。教師も一緒に面白がって調べる。

早速、「絵本の部屋」から図鑑を持ってきて、戸外のいつものテーブルの場所で、虫の図鑑を探してみるが、同じ形の幼虫が載っていないために、分からない。「謎の虫だから『なぜムシ』だ！」と「なぜムシ」と命名された。「これは、誰も知らないムシだ！」「大発見だね！！今日の帰り（の集まりの時）のニュースにしよう！」と紙に（発見したムシの）絵を描く。

その日、家に帰ったY男が、家の畑で「なぜムシ」を発見。母親に「幼稚園にもいるのと同じだ。なぜムシだ。」と伝えた。虫を見ながら、母親とタブレットで調べてみると「テントウムシの幼虫」であることが分かった。

■6月19日 「ムシムシ研究所」を作ろう！

翌日、登園するとY男は先生や友達に「なぜムシは、テントウムシの赤ちゃんだよ！」と伝えた。みんなが驚き、早速畑に見に行き、テントウムシ図鑑に載っていた幼虫と比べてみたら、そっくりだった。大発見である。それを、近くにいた園長先生に「園長先生、なぜムシは、テントウムシの赤ちゃんだった！」と張り切って伝えていた。「どこにいたか教えてあげる」と泥場近くの本へ案内し、幼虫の居場所を得意げに教えていた。近くには、2mm程度の白い繭玉状の卵があり、泥場の堀には成虫がいた。それを見て「（大きな）途中なのかな？」とつぶやく声が聞こえた。「調べるのは、どこでしたらいいんだろう？」との担任の言葉掛けに、「そうだ、集まる場所を作ろう！」「虫かごの隣のやつ（マルチパネ）を持ってこよう！」とすぐに数名で以前にもごっこ遊びで使ったことのあるマルチパネを駆け足で取りに行っていた。



今まで拠点にしていた園庭の畑や池、果樹等の木々の近くのテーブルの横に運び、組み立てると「ムシムシ研究所」の場ができた。早速『ムシムシけんきゅうじょ』と書いた看板を貼っていたが、その後の雨で濡れてとれてしまってから、看板は特に必要ではなかったようだ。

できた場所には、虫の入った飼育ケースが置かれていた。以後、この場所が、ムシムシ仲間の集まる場所となった。隣のテーブルの上で、図鑑を開き、絵を描くなどの研究活動が始まった。

■6月21日 年中児の発見したチョウチョを調べよう！

年中4歳児が、園庭でチョウチョを捕まえたが、なんと言う名前なのか分からない。そこで、[ムシムシ研究所に調べてもらうように教師は後押しをした](#)。

早速、図鑑などで調べて、「エゾシロチョウ」と分かり、チョウの絵と名前を書いて、依頼のあった年中さんに結果の報告をする。

これをきっかけに、[他の学級の子たちがムシを見付けたときには、「調べてほしい！」と言うようになった](#)。依頼を受けて、「分かりました！」と張り切る姿が見られた。

■6月22日 図鑑に載っていないから、みんなで図鑑を作ろう！

[「テントウムシの幼虫は、図鑑に載っていないから、みんな知らないんじゃない？」と担任が伝えると、「そうだね。じゃあ、みんなで図鑑を作ろう！」ということになった](#)。[図鑑に何を書いたらいいの、どうしたらいいのかを考えるように言葉がけをする...](#)

年少ひよこ組から分けてもらった『コオロギ』、池で泳いでいるのを見付けて捕まえた『あめんぼ』、なぜムシと分かった『てんとうむしの幼虫』の絵を皆が描き、名前や特徴などを書き込んで、合わせて3冊つの図鑑ができた。「[足の数](#)」「[アメンボウは雨のにおいがする](#)」「[細かい毛がたくさんあるので、水の上を泳ぐことができる](#)」、「[なぜムシは、トゲトゲしているのとつるつるになりかけているのかいる。変身している途中だ！](#)」等の特徴を図鑑に書いていた。

図鑑ができた後は、「[学級のみんなにも発表したい！](#)」と、降園前にムシムシ研究所のみんなで発表する機会を完成させた。「なぜムシはテントウムシの幼虫です。」「図鑑も作りました。」など発見したことなどを伝えると学級のみんなからは、「すごい！」「図鑑も作れちゃうなんて…」という声があり、ムシムシ研究所の子らはとてもうれしそうにしていた。



以下は、ここまでの事例を一旦のところ、本園の研究の3つの視点「気付く・できる力」「考える力」「学びに向かう力・楽しく頑張る力」で幼児の姿をまとめ、その姿につながる教師の援助や環境の構成と、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に落とし込んで考察してみました。

きりん組 「ムシムシ研究所」

園庭で男児数名が虫探しをしていると、「先生！ここに虫がいるよ！！」と発見した子がいました。「何の虫だろう～？」と不思議そうに見つめる子どもたち。教師は、興味をもったことを友達と一緒に考えたり、調べたりすることを楽しんでほしいと思いました。「調べたらいいんじゃない？」と声を掛けるとすぐに一緒に虫探しをしていた仲間と何の虫か調べることになり、「ムシムシ研究所」が始まりました。友達といざこざになってしまうこともありましたが、友達と一緒に虫を捕まえ、観察したり、調べたりすることを楽しむ姿が見られました。

<気付く・できる力>

捕まえた虫を飼育ケースに入れ、観察すると「足は6本」「角（触覚のこと）が2つある」など虫の特徴に気付く子がいました。すると、友達の発見を自分でも確かめています。ある子が「（虫が）小さくて見えない」と言うと、「じゃあ虫眼鏡を使えばいい！」と伝えている子もいました。

名前が分からない虫を捕まえたときは、自分たちでいろいろな虫が載っている図鑑を探してきて、同じ虫がいないか探す姿がありました。

健康 自立心 思考力 数量・文字

社会生活 芸術

アメンボがたくさん！
捕まえよう！！



“なぞムシ”はここにいたよね！

<考える力>

捕まえた虫の食べ物を調べると、図鑑に“アブラムシ”と書いてありました。「死なないようにエサを探さなきゃ！」とエサ探しが始まります。見付からないときは近くの教師に聞きにいく子や「捕まえた場所にいるんじゃないかな」と考えて探す子がいました。

また、「みんなが調べたこと、他の友達は知らないんじゃない？」と伝え、図鑑を作ることになりました。発見した虫の色や形を確認して絵を描きます。本物の図鑑みだいのようになるように発見したことや図鑑で調べたことを言葉でも書きました。

社会生活 思考力 感性・表現 協同性
言葉 自然・生命

じゃあ、ア
ブラムシは
ここかな？



新しい虫のことを
図鑑にしよう！

<学びに向かう力・楽しく頑張る力>

穴掘りをしていてクワガタの幼虫(?)を見付けたときは、発見したことが嬉しく「もっと見付けたい！」と園庭のいろいろな場所を掘りました。虫の観察を通して、形や動きに面白さを感じ、新しいことを発見することが楽しく、もっと調べようと意欲的な姿がありました。

図鑑を作った日、学級で発表する時間を作りました。終わったあと、「さすがムシムシ研究所！図鑑も作れるなんてすごいね！！」と伝えると嬉しそうな表情でした。「明日は何の虫を探す！？」と前向きな言葉が聞こえました。新しいことを発見したり、役に立ったりしたことが嬉しかったようです。

健康 自立心 協同性 社会生活 感性・表現 言葉

<養護（安心・安定・アタッチメント）>

小さなことでも発見したことに「よく気付いたね！」と伝えることで自信をもって探そうとする姿がありました。「図鑑作りは一人では大変だったら友達と一緒に作ってもいいよ。」「難しかったら先生も手伝うよ。」と伝えておくことで安心して取り組むことができました。

健康 自立心 協同性

『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』とは・・・

健康 自立心 協同性 道徳 社会生活 思考力 自然・生命 数量・文字 言葉 感性・表現

○前頁の事例の姿につながる教師の援助と環境の構成

<気付く・できる力（知識及び技能の基礎）>につながる援助・環境構成 - 虫の特徴をよく観察していることや、気付いたことを認める言葉掛け - 友達の発見に気付くことができるような言葉掛け - 虫をよく観察できるように虫眼鏡の準備 - どうしたら虫の名前が分かるか、気付かせる投げ掛け - 図鑑を使う際、どここのページを探したらいいかを気付かせる投げ掛け	
<その他この遊びの中で行われた援助・環境構成> ※ 発見したことや気付いたことを友達と共有できるように、拠点作り（ムシムシ研究所）の投げ掛け ※ 図鑑に書きたい文字が書けるよう、同じ文字があるところを知らせる、五十音表を使うことを提案する等 ※ アメンボを捕まえる際の道具に気付かせる問い掛け	
<考える力（思考力、判断力、表現力等の基礎）>につながる援助・環境構成 - 自分なりに虫の特徴をとらえて絵を描いている姿を認める言葉掛け - 図鑑には何を画いたらいいかを考える投げ掛け - アブラムシの探し方を考える投げ掛け - 捕まえた虫をどうしたらよいか考える投げ掛け（エサはあげる？学級で飼う？など）	
<その他この遊びの中で行われた援助・環境構成> ※ 自分たちで「この遊びの時間」を考える問い掛け（何時までムシムシ研究をするのかなど） ※ 虫眼鏡をなくさないで使うためにどうしたらいいかを考える問い掛け ※ みんなが描いた絵をどうやって本にするかを考える問い掛け	
<学びに向かう力・楽しく頑張る力（学びに向かう力、人間性等）>につながる援助・環境構成 - 虫を探したい、捕まえたいという思いや意欲を認める言葉掛け - 捕まえたこと、気付いたこと、発見したことを認める援助 - 虫の動きや形に興味をもったり、面白さを感じたりできるような雰囲気作り - 友達と力を合わせて「完成した」と達成感を感じられるような言葉掛け - 完成した図鑑を友達に伝える時間づくり、認める言葉掛け	
<その他この遊びの中で行われた援助・環境構成> ※ 一緒に遊んでいる仲間が分かるよう、一人一人に共通の印（マーク）をつける ※ 「○○のことを探す、調べる」など目的を確認する話合いの場作り	

○この遊びの中で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」につながる主な姿

健康な心と体	- 虫を探すために、穴を掘ったり、走って追いかけてたりして体を動かして楽しむ姿 - やりたいという思いで取り組んで楽しさを感じる姿 - 遊びの終わりの時間を見過しながら遊ぶ姿 - 池（ビオトープ）に落ちないように気を付けてアメンボを捕まえる姿
自立心	- 虫の名前がすぐ分からなくても諦めずに調べようとする姿 - 自分なりに虫の特徴に気付いたり、絵を描いたりしている姿
協同性	- 仲間を意識して、目的を共有していく姿 - 一緒に虫を探したり、観察したり、気付いたことを伝えたりする姿 - 遊びの拠点作りに必要なマルチパネルを協力して運ぶ姿 - 友達と一緒に図鑑作りに取り組む姿
道徳性・規範意識の芽生え	- 観察の場所が狭いときに、場所を譲り合う姿 - 虫眼鏡をみんなが使えるように譲り合う姿
社会生活との関わり	- 幼稚園で分からなかった虫を家庭でタブレットで調べる姿 - 友達と図鑑を用いて調べる姿
思考力の芽生え	- 友達の気付いたことを知り、自分でも確認する姿 - 虫がいた場所にエサがあると考えて探す姿
自然との関わり・生命尊重	- 翌日も観察できるように虫かごにエサや住む環境を整えている姿 - エサがないときは虫を逃がす姿
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	- 図鑑の文字を読んで調べる姿 - 研究所の看板を作る際に名前を書いたり、調べた虫の名前を書いたりする姿 - 捕まえた虫の数、触角や足の数を数える姿
言葉による伝え合い	- 発見したことを友達に伝える姿 - 時間や目的を決める際に考えを伝える姿
豊かな感性と表現	- 調べた虫を絵に描く姿 - 虫の形や動きを見て面白いと興味をもつ姿

② ムシムシ図書館を作ろう！

■6月27日 図鑑が読める場所を作ろう！（ムシムシ図書館）

みんなで描いた3冊の図鑑を「いつでも見ることができるように」と学級の本棚に置いていた。「ここに置いておくと、きりん組さんは見ることができるけど、他の学級の人は見ることができないね。」と担任が言うと、「じゃあ、絵本の部屋に置く？」とホールの横の絵本の部屋を見に行く。すると、「置いておく場所がない！」ということで、考え合った結果、自分たちで図書館をつくることになった。

これまでのおうちごっこやお店ごっこなどで周りを囲って遊びの場を作ってきた経験から、「段ボールで囲って作ってはどうか？」ということになった。早速段ボールを探しに行くと、ちょうどよい大きさの大型段ボールがあり、広げて場を作り始める。

「壁にも飾り付けをしたらいい」とR男やU男が言ったことから、折り紙などで虫を作り、木に貼り始める。H男は「虫がとまる木を作れば？」とアイデアを出す。担任「どんな木？」H男「本物みたいな木」と立体の木を思い浮かべていたようだ。その後、茶色のビニール袋に紙を詰めて幹とし、緑のビニール袋では木の葉を作り、壁の段ボールに木を付けた。

セミを折っていたので、折り方が分かり、R男が「教えてあげる」と言いながら、何人かでセミを折り、他に知っているムシも作り、図書館の木に飾り付けた。

Y男は、絵本の表紙が見えるように置きたいと担任に伝え、(右上写真)絵本の部屋にある書棚を見ながら、段ボールを自ら探して、箱をくり抜き、筒状の棒を付けて絵本を斜めに置くことができる書棚を作った。考えたことを実現させるために行動し、自分で成し遂げようとする力がついてきた。



ムシムシ図鑑を閲覧中！



3冊の図鑑ができた！



「こうすると図鑑が見やすくおけるよ」

③ ドクガ虫注意を知らせよう！（ムシムシ避難訓練）

■6月28日 「危険なムシのことをみんなに知らせなきゃ！」

朝から、ムシ仲間たちは、虫探しをしていた。ある子が、新しい虫を発見して、Y先生へ伝える。Y先生が見に行くと、何だか怪しげであったので、触らないように伝え、直ぐに絵本の部屋へ行き、図鑑で調べると、やはりドクガ虫であった。Y先生が、刺されたらかゆくなることをムシ仲間にした。

Y男は、ドクガ虫の絵を描く。Y男やR男らが、「避難訓練しなきゃ！」と言い始めていたので、教師が、他の教師に事前に伝え、できそうだったのですることにした。

S男は、「避難訓練をしよう」ということを他の教師に事前に伝えていた。ムシ仲間たちは、「避難訓練をどうやってやるの？」とY先生が聞くと「みんなを集める！」「笛をならす！」「危ないって知らせる！」「毒があるって言う！」などと、答えていたので、避難訓練をしても、集まったみんなに伝えることができると考え、実施することになった。



これがドクガ虫！

ちょうど1週間前にした「不審者の避難訓練」を覚えていて、笛を断続的に鳴らし、避難を知らせることが分かっていました。笛を吹きたい幼児が数人いたが、笛の数が少なく吹けない幼児もあり、「メガホンを使いたい」という子が二人いたので、似たような形（円錐状）の砂場の道具があることを教師が知らせると、早速取りに行き、避難訓練の際に使用して叫んでいた。

幼児たちが笛を吹き、大声で集まるように叫ぶことで、園庭にいた幼児たちと先生方が集まってきた。（3歳児は、片付け中だったので、参加せず）

いざ集まると、集まった幼児たちにはうまく伝えられず、教師が、「どこにいたんだったっけ？」「見付けたら、どうすればいいんだっけ？」などの言葉がけをすることで、何とか集まった幼児たちには、「ドクガ虫がいて、触ると危険であること」が伝わっていた。その後、実際に虫を見ってもらうことになり、ムシ仲間が案内することになった。「ここにいます」と虫網をかけて、木の幹を指さしたり、「危ないから触らないで！」などと伝えたりしていた。その時は、年中さんは、真剣な表情で見たり聞いたりしていた。避難訓練をして、ドクガ虫に注意することを伝えると、みんなが気を付けるようになった。



■6月29日 地図を作ったらいいんじゃない！（ムシムシ地図作り）

「幼稚園のみんなは、ドクガ虫がどこにいるのか分からないね」と担任が口にする、「地図を作ったらいいんじゃない」という考えが出てきた。園庭は広いので、画用紙では小さくて書ききれないということで、幼児と大きな紙を探し、模造紙に書くことになった。これまでにチョウチョを捕まえた場所や位置関係、畑や木の大きさなど、いざ描くときになると、大きい・小さい、近い・離れているなどで意見が分かれて、けんかになることもあった。

意見が分かれてしまうところは、園庭を見て確認するように言葉をかけることで、自分たちで地図を完成させた。ドクガ虫、テントウムシ、アメンボなどこれまで見付けたムシや危険なところなどを描いている。

園のみんなが見ることができるよう、ムシムシ図書館の壁に貼ることにした。



「ここにドクガ虫がいたね！」



「ムシムシ地図」園庭で見付けた虫を書きました

④ 街の人にも伝えなきゃ！（ドクガ虫注意のポスター掲示）

■7月3日 「街の人にも伝えなきゃ？！」

Y先生から「本当に危険なムシだから、見付けたら幼稚園の外に逃がしてね。」と言われたので、ドクガ虫を見つけた時には、担任に伝えて、割り箸で捕まえて園外に逃がしてもらい、「助かった～（ホッ）！」と皆で胸をなでおろしていた。ドクガ虫はその後2回ほど発見され、その都度、避難訓練をして、他の学級の友達を集めて、その都度お知らせをしていた。

ドクガ虫を、箸で捕まえて、園外に逃がした後で、「これで、幼稚園の人は、大丈夫。」「でも、街の人の安全は大丈夫かな？」と心配する声があがった。「街の人に、どう伝えたらいいだろう？」と担任。

「（ニュースの人のように）テレビに出て、お知らせする。」「テレビの人は忙しくて来ることができないよ。」

男「じゃあ、絵に描いて、貼ったら？」「ポスターを作ればいい！」ということで、その日のお弁当後には、右写真のように「ポスター書き」が始まった。お弁当を食べながら、「虫の絵を描いて、この虫を見付けたら逃げてください」って書こうと周りにいる友達に伝える。「それいいね！」

「 このマークも付けなきゃ」と注意喚起マークのことを知っている幼児どもがみんなに伝えていた。

ちょうど土砂降りの雨の日で、以前、ムシムシ研究所の看板が濡れてしまった経験から、「ポスターを濡れないようにしたい」と、ビニール袋に入れてしっかりとテープで止めて、カッパを着て園庭に出て行った。

ポスターを貼る場所を探して、「ここなら、街の人も見えてくれる」と園のフェンスの外側の国道沿いの角に貼ることにした。一人1枚描いていたので、フェンスに何枚もポスターが並んで掲示された。「これで、街の人でも大丈夫」とホッとしていた。貼りに行ったときに、降園時に迎えに来た保護者や小学生が下校時に見てくれたなどの報告もあった。



「ドクガ虫は、黄色だったね」



「街の人に伝えよう！」



「ビニール袋にいれたよ」



「どこに貼ったらいいかな？」



「ここなら街の人も見えてくれるね」



「ここにも貼っておこう！」



⑤ ムシムシ研究を発表しよう！

■7月5日以降 ムシムシ研究をみんなに伝えよう！

これまで、調べたことを図鑑や図書館、地図、避難訓練、ポスターなど様々な方法を通して知らせてきた経験を生かして、担任は、誕生会で発表してはどうかと考え、幼児たちに提案してみた。

すぐに「やりたい！！」という返事が返ってきた。

●何をどのように発表するか？

発表したいムシを決め、2人ずつ5つのムシを発表することになった。チームの友達ともう一度図鑑を見直す、発表する時の言葉を決めるなどし始めた。発表の方法は、「写真を使う」「虫かごを見せる」などいろいろな意見が出る。

●どの虫の何を発表するか？

《バッタ》…H男・R男が発見したバッタ。

「小学校で散歩した際に見付けたバッタと園庭で見付けたバッタを発表したい。」ということで、図鑑で虫の特徴を手掛かりに調べてみると、「コバネササキリモドキ」と「イボバッタ」いう名前だと分かった。図鑑では、なかなか詳しい名前を見付けることが難しく、前日まで発表内容が決まらずにいた…。

担任も、インターネットで画像を探し、似たバッタを見付けたので判明。体の特徴や動き（足でピョンと跳ぶ）などに注目する。

《アメンボ》…H男・S男

「（発表するには）写真を撮らなければならないから、また池でとってくるね。」と二人で捕まえにいく。「幼稚園のビオトープで見付けたことを言いたい。」担任「あと、何あるかな？雨のにおいすることは？ふわふわの毛が付いているよね？」二人は、図鑑に書いてあることを思い出して話すことを決めていた。

《なぞムシ（テントウムシの幼虫）》…Y男・J男

「（発表には）写真と絵を使おう！」と、（変身している）途中のところも知らせよう！と途中の写真があったので、それを使う。見付けた場所も知らせると言うことになった。

《ドクガ虫》…I男・M男

「ドクガ虫は、マイマイガなんだ！」と図鑑で調べて分かった。毛を触らない、触ったら危険など教師に教えてもらったことを伝えることになった。

《クワガタの幼虫》…S男・U男

「まず、図鑑でもう一度確認しよう！」「あっ！ビニール袋かけて飼わなきゃだめなんだって！」「クワガタになるには、1～2年もかかるんだって」「このあと、サナギになってクワガタになるんだねえ～」と発見したことを発表する。



「なんていうバッタだろう？」



なるほど、こうやって飛ぶんだ！



アメンボは雨の匂いがする！



なぞムシ（テントウムシの幼虫）



ドクガ虫

■7月10日 テレビのようにカメラの人になろう！

ムシムシの研究発表にあたって、「記者会見みたいにしたらどうかな？」と担任から声を掛けると男児らは、「面白い！いいね。」と意欲的な姿が見られた。

S男「先生、謝るの？」

担任「え、謝るの??」（もしかして謝罪会見?のこと）

S男「だって前テレビで見た時こう（頭を下げて）やっていたよ！」

担任「よく知っているねえ〜!」「発表するときも会見ってするんだよ!」と伝えりと張り切っていた。

さらに「カメラの人がいたら面白いかも!？」と言葉を掛けると、これまではムシムシ研究所にはあまり関わっていなかった女児たちが「テレビカメラやる!」と張り切る様子が見られた。

S子が「私、テレビカメラ知っているよ!」と意欲的で、その日家に帰ってから、設計図を書き、翌日園に持ってきた。その設計図を友達にも説明して、早速カメラ作りが始まった。

「三脚」「のぞくところ」「動がすことができる」ことがポイントなど、知っていることを伝え合いながら、これまでの経験から、何の素材を使ったらよいかを考え、自分たちで探して作り始めた。三脚は長い紙筒、動くところはキャスター付きの大型ブロック、段ボールに穴を開けて、向こうが見えるようにカメラの部分を作る。3〜5名の3つのチームで3台のカメラを自然と役割を考えて作っていた。

「音を拾うためのマイクも必要かも?」との担任の言葉で、「それ、知ってる。音を集めるんだよね。」と集音マイクも作るようになった。



S子の書いた設計図



■7月12日 ムシムシ研究発表会…7月誕生会のアトラクション

前日の練習で、R男が「まだ不安だから明日も朝練習したい!」ということで、当日の朝にも、最終練習をした。皆の前でも大きな声で、しっかりと話をすることができるようにと、何度か練習をしていた。

いざ自分たちの出番になったとき、男児らは、2人ずつ大型テレビに写るムシの絵や写真を見せながら、自分たちの調べたムシについてとても真剣な面持ちで、いつもより声が小さくなるなどの子もみられたが、おおむね、これまでの研究してきたことを園の皆さんに発表していました。



記者会見のように発表しました!

女児らは、テレビカメラを撮る人と音声を拾う人になって、ムシムシ研究発表の様子をスタジオのように再現していた。

その後の誕生会のおやつの時、学級のみんなが集まって、「(ムシムシ研究発表会)大成功!」と喜び合った。



なぞ虫は、テントウムシの幼虫でした!



音声さんもなりきっています

《考察》

担任からの働き掛けに、興味を示し、自分たちで考え、アイデアを広げ、必要な物を作ったり、相手に伝える方法を考えて、試行錯誤したりして、作り上げてきた遊び。子どもたちが、自ら人や物、虫や自然にある出来事や不思議と様々にかかわりながら、気付いたことを相手に分かるように伝えたり、イメージを広げたり、主体的に遊ぶ楽しさを味わってきたムシムシ研究所。この遊びや体験から、創造性の芽生えが育まれ、人に対しても関心を向け、大切に思う気持ちも育まれてきました。

3 科学する心を支える

「保護者との研究の取組」

(1) 家庭での関わりを豊かにする「宿題」の取組

本園の研究テーマに沿い、幼稚園では、幼児たちが物事を前向きに捉えて、あきらめずに取り組んだり、失敗しても立ち直ったりすることができるように、教師の働き掛けや環境の見直しを行っている。

御家庭でも、幼児たちが最も安心できる心の基地となるような温かい関わりを築いていくきっかけとなるよう、1年間に3回の宿題の協力を依頼している。

下記のA～Dの中から家族でできそうな無理のない課題を選択し、一週間程度取組、その感想や振り返りを出していただいている。

*上記の感想を取りまとめ

て、保護者に次ページの研究だよりを発行して、次頁のように家庭での取組の様子をお知らせした。

(1) ほっぽちゃんからの

研究だより

よく分かる!

第1号



平成29年(2017年)6月5日

札幌市立もいわ幼稚園

園長 笹山 雅司

もいわ幼稚園では、札幌市の研究実践園として、子どもたちの「知・徳・体の調和のとれた育ち」を目指して、実践的な研究を行っています。

○平成29年度もいわ幼稚園の研究テーマは…

自分の力や考えに自信をもち、前向きに行動する子ども

～感じる、気付く、分かる、できるようになるための豊かな体験を通して～

○このテーマにしたわけは…こんな姿が気になっているのです。

やったことがないとやできないことがあると、避けようとする。



失敗するとあきらめてしまう。負けを受け入れられない。



発達に見合った知識・経験や物を使いこなす技能が十分身についていない。

「まずはやってみよう」「できなくても挑戦してみよう」という気持ちをもってほしい



家庭では…

失敗しても安心してまた取り組める関わりにより、「自分でできること」が増えていくように!



幼稚園では…

豊かな体験の中で、感じたり、気付いたり、分かったりできるようになるための援助や環境構成の工夫を!



分かったり、できたりして、自信や意欲がもてると…

遊びの中で力を発揮しながら、前向きに、主体的に取り組むことができる…



● 次の中から1つを選び、5日～1週間程度続けて取り組んでみてください。

A

お子さんが甘えてきたら、できるだけその時に抱っこに應じる。(どうして今、甘えてきたのかな?何をしてほしいのかな?と考えてみましょう。)

B

手伝いをしてくれたら、小さなことでも「ありがとう。」を言う。(大人にとって助けにならないことや、かえって手間が増えることでも、認めてあげましょう。)

C

お子さんが気付いたことや感じたことを言ってきたら、「そうなんだね。」と顔を見て受け止める。(時間がある時は、手を止めてゆっくり聞いてあげましょう。)

D

間違えたり失敗したりした時、「頑張ったね。」「～しようとしたんだね。」「～すれば大丈夫だよ。」と励ます。(これを何度も繰り返してあげましょう。)

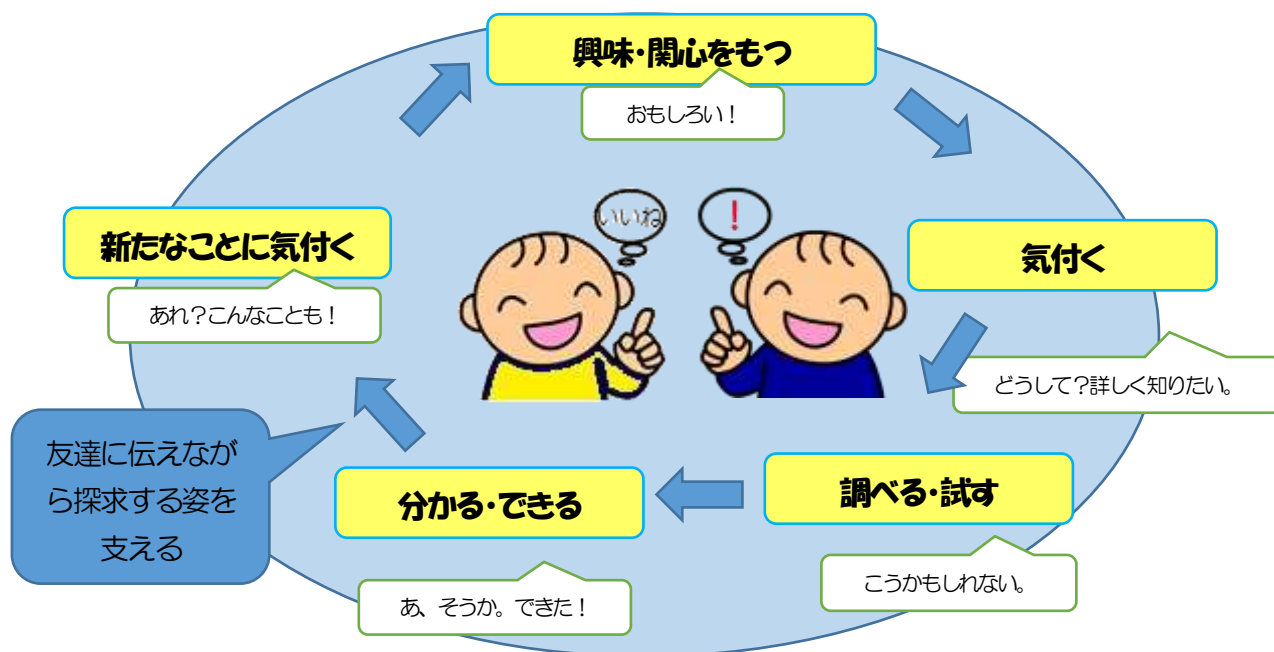
4 おわりに

2つの事例を通して、幼児たちの気付きやつぶやきを丁寧に拾いながら、教師もその気付きを受け止めたり、面白がって関わったりすることでもっと「知りたい」「やってみたい」という思いをもたせるとともに、友達にも伝えていくことができるように支えることで、**自分たちの関心ごと**として遊びが進められるようになってきている。雪山の遊びと身近な虫への興味・関心が、様々な出来事や発見がありながら幼児たちの中で思いが長期に渡って継続して進められた遊びであった。

このように幼児の興味・関心に思いを寄せ、感じたこと、不思議に思っていること、驚いたことなどに寄り添い、一緒に面白がって調べたり、友達に伝えて一緒に考えたり、疑問を伝えたりすることで、幼児のもっと知りたい、やってみたいという意欲にスイッチが入り、さら追求しようとする姿につながってきている。年長児の遊びへの意欲や面白さは、他の学年の幼児にも広がり、それぞれの遊びで見つけたことやできたことを面白がって取り組むようになってきている。そのように**園の空気が「遊びって楽しい、面白い」**というように変わりつつあると感じている。

また、自分の関心ごとが友達にも受け止められることで、互いの関心ごとにも気付くようになり、例えば、年中児の捕まえたチョウチョの名前を調べて描き、名前を書いてお知らせするなど、相手にも分かってもらえるように考えたり、危険なムシだから園の友達にも、そして、地域の方にも知らせなければならぬと考えたりと相手意識が高まってきたのだと考える。

さらに、下記の図のように、遊びへの興味・関心から始める循環の中で生まれる幼児の思いに寄り添い、援助を重ねることで、ある子の気付きが、他の子に伝えて受け止めることで、幼児なりの探求が進んでいく様子も見られた。気付き、発見したことを受け止めてくれる教師や友達とさらに面白がって探求していくことで、さらに次の気付きの面白さが増したり、気付きのアンテナが鋭くなったりしていくことも感じた。



<これまでの成果と課題>

まだ、研究の途上であるが、実践事例をまとめる中から、以下のことが分かる共に、さらに実践を通して深めていきたいと感がある。

1 身近な生き物や自然事象に興味関心をもち、追求する過程を友達とさらに深めていく。

- ・ムシムシ研究所では、教師も面白がって遊びながら、次の遊びにつながるヒントとなる言葉を投げ掛けることで、それをキャッチした幼児たちが、自分たちで試行錯誤する様子が見られた。教師自身も幼児と同じように疑問に思ったり、推測したり、試行錯誤したりする楽しさを感じ、幼児と共にその発見を面白がり、興味関心が高まったり、物事を深く追求したりする姿勢を今後も育てていきたい。

2 人との関わりの広がいや深まりから、相手の思いに立って行動したり、伝えたいする心をはぐくんでいく。

- ・雪山作りの事例では、地域の建設会社の方との出会いがきっかけとなり、自分たちの雪山を作ってくれたことで、雪山とのかかわりが豊かになっていったと考える。そして、降雪の日には「自分たちが除雪をしなくちゃ」と自分事のように張り切る姿につながり、その思いが他の幼児にも広がっていったことが分かる。年下の子が滑りやすいように考える姿が、雪山を満喫して遊ぶ姿を経て、次の学年の幼児にも春先の雪山での穴やトンネル掘り、雪解け水を使った遊びの楽しみ、そして、今度は自分たちが雪山作りを頼みに行くという思いにつながる姿からも分かる。
- ・ムシムシ研究所では、年中児の捕まえたチョウチョを丁寧に調べて伝える姿、ドクガ虫が危険な虫であることが分かったと、他の友達にも伝えるために、避難訓練という生活の中で経験した避難訓練という方法を生かす姿、ドクガ虫のことを園外の「街の人」も伝えなきゃとポスターを雨の中でも貼りに行くなど、自分たちとかかわる人に対して、相手の思いになって行動する姿などから、人に対する思いやり、感謝の心が育っていくことも分かった。



このように、本園の幼児が前向きに力強く行動していくことができるように、「科学する心」を大切にしながら、今後も保育実践を深めてきたいと考えている。このような機会を与えていただいた、ソニー教育財団の皆様には心から感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。

札幌市立もいわ幼稚園



○執筆者：園長 笹山 雅司

○研究同人：教諭 山根 未奈

教諭 久慈道 弥佳

教諭 荒木地 明子